課題解決的な学習の定着をめざして

－１年生における説明的な文章の学習を通して－

岩　本　和　貴

１　取り組みの概要

本校国語科では，課題解決的な学習を中心とした実践に取りくんでいる。今年度は，学習ステップの「ふりかえる」に焦点を当てて実践を進めた。課題解決的な学習において，設定した「学習課題」が適切であったかどうか，解く過程での工夫はどうか，たどり着いた結論はどうか，などをふりかえることは，「学習課題」の質そのものを高めるために重要である。つまり，「学習課題」設定のステップと「ふりかえる」ステップは，常に連動していなければならない。

１年生の子どもたちは，４月当初から学習の進め方について，段階を追って学んできた。国語科の冒頭や「成果と課題」でも述べたように，低学年次の学習は，「自ら学ぶ」ことを目指す子どもたちにとって大切な経験であり，思考の引き出しになるものである。これからの説明的な文章における課題解決的な学習の仕方が身につくようにするために，１年生ではどのように学習を進めればよいか。本稿では「どうぶつの赤ちゃん」への取り組みを中心に，学習ステップの「ふりかえる」過程について，「学習課題」の材料にしている子どもの初発の感想とどう関わり，変化させていくのか，という視点から整理していきたい。

２　１年間を通じた説明的な文章への取り組みの概要（教科書は光村図書，「たねのふしぎ」のみ　学校図書）

１年間で取り組んだ説明文教材は，結果的に４つである。結果的に，というのは，うち１つが教育実習生の取り組んだ投げ入れ教材で，当初の計画外のものだったためである。「どうぶつの赤ちゃん」に至るまでの取り組みについて概要を述べる。

(1)　「とりとなかよし」

この教材は，１年生が初めて出合う説明的な文章である。「とり」と「なかよしのどうぶつ」の関わりについて，鳥の紹介→問いかけ→答え→具体的な説明という形式で，簡潔にわかりやすく述べられている。子どもたちには，説明的な文章というのはどのようなものかについて理解し，述べ方，それぞれの鳥や動物の比較を通じて，内容理解を深め，述べ方について考えることができるようにしたいと考えた。また，「なかよし」の中身について考え，本当の意味で「なかよし」と言えるのかどうか，話し合うことができることもねらってみた。

わずかに，テレビの特集などで，このような内容を見聞きした子もいたが，ほとんどの子どもにとっては初めて触れる知識内容で，大きな興味と関心をもった。読後の感想にも，新しく知った事柄への驚きが，新鮮に表れている。１年生では，これらの感想や気づき・疑問を私自身が整理し，子どもたちに紹介しながら，「学習課題」を設定していった。初発の感想には，「とりとどうぶつが，なかよしだったのは，しらなかった。」という内容の反応が多かった。どちらかと言えば，読んだままのものである。そこで，「なかよし」の意味について考え，表題の付け方がよいかとどうか，吟味できるように働きかけた。教科書の内容（活字になって印刷されている内容）は絶対だ，という子どもたちの概念砕きもできれば，と考えたのである。まとめの段階で，やや強引に表題に目を向けさせる結果となり，反省した。しかし，子どもたちが文章の中身をじっくり吟味して読む姿勢をつくるきっかけになったと思う。普段意識せずに読んでいる文章の構造に，筆者の意図が働いていることを学んだのは，子どもたちにとって多少の意識改革になったようだ。

(2) 「じどう車くらべ」

古典的な教材で，改編を重ね，明瞭な骨組みの文章として成立している。この教材も，問題提起を意識して，事例を比べ，述べられていることの違いを考えて読むと面白い教材である。

「じどう車くらべ」の内容そのものは，「とりとなかよし」とは違い，子どもたちにとって身近であり，特に男児には興味・関心が高い。したがって，初発の感想でも，「知っていた」「知らなかった」という程度の反応に留まらず，車の種類ごとに実に細々した気づきや疑問があった。中でも，子どもの記述は「クレーン車」についてのものが大変多かったので，「どうしてみんなクレーン車のことが気になるのかな？」という「学習課題」を設定してみた。そして，「クレーン車」と比較する形で，他の車の記述についてまとめていった。ワークシートにまとめる際，違いがわかる言葉をできるだけ簡潔に比べる練習もしてみた。できるだけ，抽象度の高い言葉で比較ができるに越したことはない，と考えたからである。結果的に，クレーン車と他の車の質の違いが明確になり，子どもにとって比較しやすい学習過程になったと考える。文章を問題提起文だけとらえて，途中から学ぶという形は新鮮だったようだ。

発展的に，子どもたちの好きな調べ学習も考えられるが，今回は文中の形式を模して，各自で調べたことをまとめることで終えた。子どもたちの興味・関心がかなり高い教材だったのに，内容的な面を十分に深めずに学習を終えたことについては，勿体なかったと思っている。

(3) 「たねのふしぎ」

この教材は，教育実習生の希望で投げ入れることになった。実習生には，それぞれの事例を比較して違いを読みとり，なぜこのような順番で事例が取り上げてあるのかを中心に，授業を進めるように指導した。しかし，直接授業を行ったわけではないので，本稿では割愛する。

3 「どうぶつの赤ちゃん」を通した具体的な実践

1年間の説明的な文章学習のまとめとなる教材である。今回は研究会で公開するため，時期が早いのだが，11月に取り組んだ。教科書には，「ちがいをかんがえてよもう」という観点が示されているが，最初の教材からそのような練習をしてきているので，子どもたちにとっては取り組みやすかったと感じている。次に，この実践について詳しく述べたい。

(1) 単元について

子どもたちにとって，本教材は4つめの説明的な文章である。これまで，説明的な文章には「おたずねのぶん」と「おこたえのぶん」があり，どのように「おこたえ」しているかを中心に学んできた。本教材も，問題提起文と事例がしっかりと対応した明解な文章構成になっている。したがって，既習の「とりとなかよし」「じどう車くらべ」「たねのふしぎ」を踏まえ，問題提起文と事例の関係を考え，整理して学習を進めるように配慮した。

本教材はライオンとシマウマについて，それぞれの生まれたときの様子と大きくなっていく様子について問いかけ，説明してある。両者の特徴について，幾つかの比較点を設定し，丁寧に述べている。子どもたちには，両者が明確に比較できることに気づくことができるように心がけた。そうすれば，ライオンとシマウマの本質的な育ちやその違いをどのように述べているのか，考察することができると考えたからである。一方，既習の教材と比べ，1つの事例の比較点が多いため，抵抗を感じるのではないかということ，子どもが実感しにくい事例や，表現があるのではないかということが予想された。そこで指導にあたっては，動物の成長の時間経過を踏まえたワークシートや資料提示による支援を工夫し，1年生にできる範囲の抽象化をすることで，比較点をしっかりとらえ，両者の違いをより明確にできるようにした。また，どんな言葉を使っているか，既習の学習も想起し，比べながら考察を深めることができるように配慮した。

(2) 指導目標

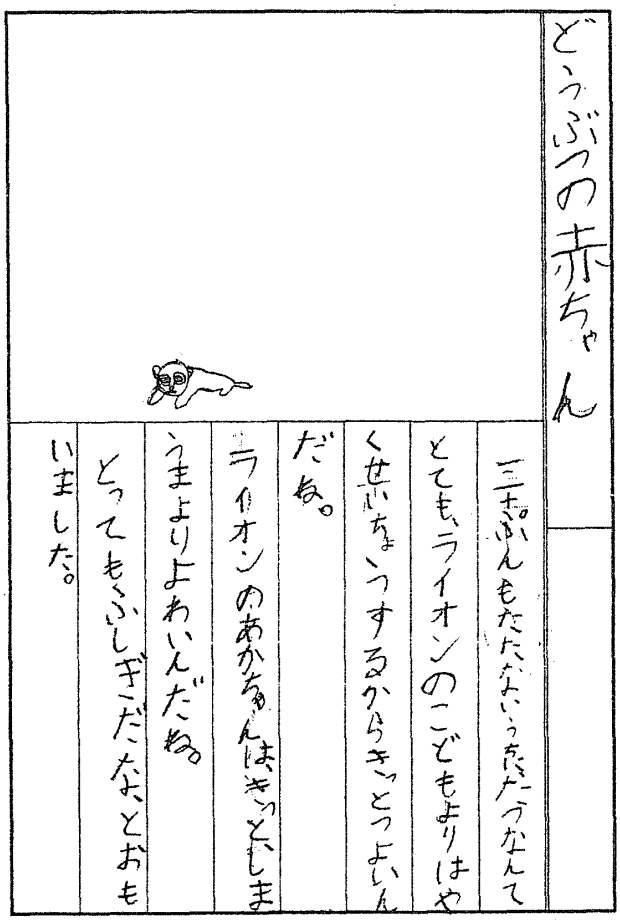
・述べられている事柄を比較することで，ライオンとシマウマの違いを明確に理解することができるようにする。
・わかりやすく比べて説明するために，何がどのように述べられているのかについて考えることができるようにする。
・自分の生まれたときの様子や育ってきた過程に興味をもって調べ，発表することができるようにする。

(3) 指導計画（全 9 時間）

第一次　表題読みから，動物の生まれたときの様子や育ち方に興味をもって読む。……1 時間
第二次　課題を設定し，本文を読んで語句学習をする。……1 時間
第三次　ワークシートに沿って，それぞれの動物について述べられている事柄を整理し，比較しながら読む。……4 時間
第四次　本文の述べ方を参考に，自分が赤ちゃんのときのことについて調べ，発表する。……3 時間

(4) 「学習課題」設定に関わって

この教材文の内容は，子どもにとって意表を突くものであるためか，不思議に感じること（疑問点）が多く挙がっている。多くは，シマウマの赤ちゃんがライオンの赤ちゃんと比べて，早く親から独立する点に集中している。また，文章を読むときの子どもの意識は，ライオンとシマウマは本当はどちらが強いのか，という点に惹き付けられている。これは，勿論筆者の意図するところであろう。子どもたちの意識がその部分に集中することで，比べる対象がはっきりするのである。子どもの書いた典型的な感想文を次に挙げる。



図－1　子どもの感想文

このような感想文をもとに，全員の話し合いで「学習課題」を設定した。ライオンとシマウマは本当はどちらが強いのか，取りあえず話し合ってみたが，簡単には意見がまとまりそうにない。そこで，どのような学習をしたらよいのか考え，話し合った。その結果，ここで述べられているのはそれぞれの赤ちゃんのときの様子であるから，両者の説明をまとめ，しっかり比較した後考えるべきだ，という結論に達した。したがって，次のような「学習課題」を設定することになった。

ライオンの赤ちゃんとシマウマの赤ちゃんは，どんなところがちがうのかな？

さらに，これまでの学習をふりかえって，これからどのように学習を進めていくか，学習活動の見通しについても話し合った。「しっかりよむ」ことが大切だという意見を柱にして，さらに具体的な学習の方法を話し合った。子どもたちから出た意見をまとめ，右のように板書した。

◎　しっかりよむ＝いみをかんがえてよむ
　○はじめから，すこしずつよむ
　　①「だい」
　　②「おたずね」
　　③「おこたえ」……ライオン
　　シマウマ
↓　○くらべてみる

(5)　指導事例（第三次第３時）

このような見通しのもとに，具体的にはどのように授業を進めたのか，簡単に述べる。

①　支援のポイント

この時間は，シマウマの成長について何がどのように述べてあるか読みとり，抽象化することで，ライオンの事例と比較できることをねらった授業である。その意味で，最初に設定した課題に最も迫ると予想された。支援のポイントとしては，ライオンに比べてシマウマはひとり立ちするのが早いことに，時間の経過とその理由を考えながら気づくことができるようにしたいと考えた。板書やワークシートに，シマウマの特徴を具体的に読みとった後，わかりやすく抽象化して書き込むように指導する。また，ライオンとシマウマの違いを，より明確にしようとする表現にも気づくことができるように配慮した。それに伴い，次のような仮説を設定した。

物事を比較してとらえるという活動を体験するならば，述べてあることの本質をとらえる力が身につくであろう。

②　目標

1　ライオンとシマウマの事例が比較できることに気づき，両者の生まれたときの様子や大きくなる様子の違いを理解できるようにする。

2　比べることを意識した表現に気づくようにする。

③　学習の展開

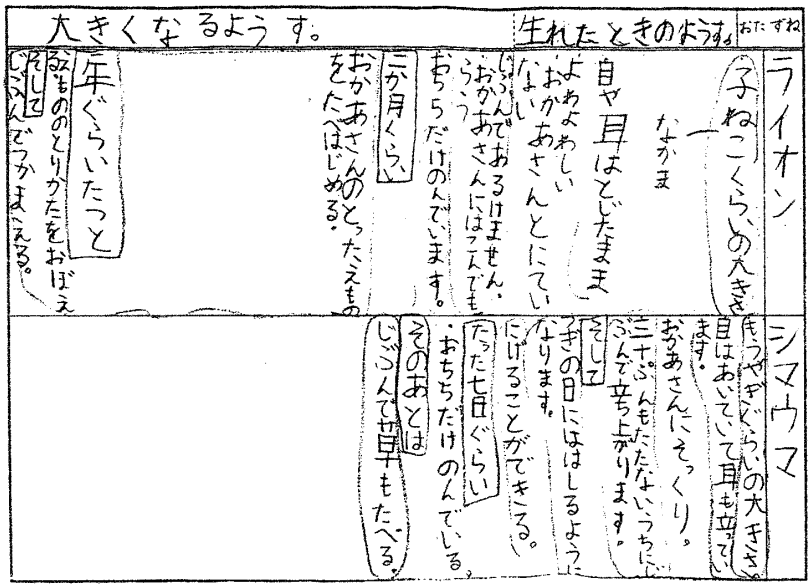
学　習　活　動	教　師　の　働　き　か　け
（前時）ライオンの事例について読みとり，ワークシートにまとめる。	
1　学習課題を確認する。	1　本時の学習課題を全体の見通しの中で確認する。
ライオンとシマウマの赤ちゃんは，どこがどんなふうにちがうのかな？	
2　シマウマの赤ちゃんの様子についてまとめる。	2　できるだけ短い言葉で言うことができるようにする。

	・問題提起文との対応を意識できるようにする。 ・第3段落を音読し，キーワードに傍線を引くようにする。 ・ライオンでのまとめ方を参考にするよう指示する。 ・まとめ方についての意見を評価し，取り上げる。
3　シマウマの赤ちゃんのようすをライオンと比べ，違いを考える。	3　ワークシートへの書き込み（板書）を参考にして考えることができるようにする。 ・どんなことを比べているのかに着目するようにする。 ・比べた結果，意外に感じた点も大切にする（ライオンがよわよわしいなど）。
4　ライオンの赤ちゃんとシマウマの赤ちゃんの違いをふりかえる。	・比較や程度を意識した表現について考えることができるように発問する。 4　各自のワークシートで振り返るよう指示する。
（次時）わかったことをまとめ，調べ学習の見通しをもつ。	

4　取り組みを終えて

教材文の内容は，きちんとひとつひとつが対応関係にあり，比較がしやすかった。子どもたちのふりかえりを見ても，内容理解の面では十分な取り組みができたと言える。

何より，子どもたちが「学習課題」を設定することを通じて，しっかりとした学習の見通しをもつことができるようになったのは，大きな成果である。学習の仕方，進め方の面で，1年間の取り組みを通じて子どもたちへの定着が深まったと考えられる。



図－2　ワークシート

しかし，本教材の特質から考えたとき，述べてある内容をできるだけ抽象化して比較することで，その本質に迫るという点で，今回の取り組みは不十分だったと指摘を受けた。右のワークシートで子どもが囲んでいるのは，同じ観点で比較されるものを，同じ色の○で色分けしたのである。子どもたちが感覚的に，比較内容を対象化しやすくするための配慮だったのだが，子どもたちの実態から考えれば，さらにライオンとシマウマを比較する中央の部分に，比較内容を抽象的な言葉でまとめていく欄を取り，書き込むようにすればよかったと考えている。

ふりかえりの結果が，子どもたちの初発の感想にどのように影響し，授業が深まり，また学習の仕方が定着したかを，1年間の取り組みを通じて簡単に述べた。具体的な資料があまり差し込めず，説明に終始してしまったが，次年度の取り組みで，この研究テーマをさらに掘り下げていきたいと考えている。